

## 中世初期イングランドの司牧をめぐる考察 —イースト・アングリアのケース

森 下 園

### はじめに

中世イングランド史を教会と社会の関係から追う論考は多いが、初期の時代については残存史料が限られており、不明な点が多い。5世紀半ばにローマがブリタニアより軍団を引き上げてからの200年は、同時代史料が少なく研究上の「暗黒時代」となっている。

8世紀以降はベダ・ベネラビリス (Beda Venerabilis, d.735) の『アングル人の教会史』(*Historia ecclesiastica gentis Anglorum*, 以下『教会史』)、ウェセックスの大アルフレッド王 (Alfred the Great, d.899) が編纂させた『アングロ＝サクソン年代記』(*Anglo-Saxon Chronicle*) などのほか、修道院の年代記などがアングロ＝サクソン時代のイングランドにおけるキリスト教のありようを知る手がかりとして現存している。それによれば、597年に教皇グレゴリウス1世が派遣したベネディクト修道士アウグスティヌス一行がケント王国に上陸し、カンタベリに司教座を設置するなどイングランドへのキリスト教再布教がすすめられた。8世紀頃までにはノーサンブリアやイースト・アングリアも含めて王族が創設したものを中心に大小の修道院が各地に出現した。

史料が豊富に残る中世盛期を見ると、司牧をめぐる衝突が托鉢修道会の成立とともに表面化するまでは、一般信徒への司牧は基本的に教区教会の司祭が担っている。修道院と教区教会の役割はどのような変遷をたどってきたのか、一般信徒に対する司牧はどのように行われてきたのかについては、史料のほか発掘調査に基づく考古学資料を活用した研究がすすめられている。

現在通説となっているのは、以下のような変遷である。アングロ＝サクソン時代には大きな教区単位で修道院付属教会 (オールド・ミンスター) や共住する司祭たちを中心となる母教会 (Mother Church) を拠点として活動していたが、10世紀から11世紀にかけて司祭がそこに居住する地域の教会または領主の荘園に属する私的所有教会が急増、さらに11世紀から12世紀にかけて木造であった教会は地方レベルでも石造りへの増改築ブームとなり、それに伴いつつオールド・ミンスターと大教区は衰退していき、13世紀までには現代のような小教区システムが完成したと考えられている<sup>1</sup>。

---

1. John Blair, 'Introduction: from Minster to Parish Church', *Minsters and Parish Churches, the Local Church in transition 950-1200*, ed. John Blair, Oxford, 1988, p.1.

だが、近年の研究では修道院教会から教区教会への移行が果たして上記のように単線的に行われたのか、初期の司牧の実態はどのようなものであったのかについて、疑問が提示されるようになった。

イングランドのイースト・アングリア地方における初期の教会と社会の関係について、司牧の観点を見ていくために、論点を整理してみたい。

## 1. 先行研究

ベーダの『教会史』や『アングロ＝サクソン年代記』などに加えて、発掘調査結果から考古学的な資料も用いた研究がすすめられている。ここではジョン・ブレアの研究をベースに、アングロ＝サクソン期から12世紀以降の教会制度の変遷と用語の問題をまとめてみる<sup>2</sup>。

### (1) 「ミンスター」(minster) から「教区教会」(parochial church) への移行

アングロ＝サクソン期の社会の中心地でもあった母教会または修道院教会などを、ブレアは「ミンスター」と総称しているが、これらは9－10世紀に減少しつつも11から12世紀までその司牧活動を継続したと見られる。ミンスターを中心とする社会共同体の組織的な変化は、社会的経済的な要因もからめて考える必要がある。

7から8世紀のミンスターとその教区共同体は氏族ベースの社会と互換性があり、社会的階層性がこれに重なる形で存在していた。一般には土地を所有している王侯貴族が自分の保有地に修道院を創建し、その一族の者が修道院長や修道士・修道女として活動し、周辺地域の住民が修道院教会での宗教活動に関与していく形をとる。ミンスターは、事実上地域の宗教的センターの役割を果たしており、保有する地代の取り立てと引き替えに神の教えと法を住民に提供していた。7から8世紀は複合的な文化の時代であり、おそらく教区制に基づく共同体のある部分はこの時期に形成されたと考えられるが、10世紀以前の教区と教区民の実態は残存史料が少なくよくわかっていない。

750年以降、ミンスターの文化的・経済的活動が成功しすぎたためにさまざまな問題が引き起こされてしまい、その結果教会改革が促されていく。ミンスターの生活が魅力的なために、創設した王侯貴族がミンスターでの生活とそれが生み出す富を諦められず、聖職売買や俗人修道院長などの教会法からはずれた運用が目立ち、非難されていくようになったのである。綱紀粛正に伴う動きのなかで、旧来の大教区は緩やかに小教区システムへと移行していったものと考えられる。

このようにして950年以降に成立した地方の教区教会はそれほど組織だったものではないが、点在していたミンスターに限られた周辺住民にしか提供できなかったキリスト教のハ

---

2. John Blair, *The Churches in Anglo-Saxon Society*, Oxford, 2005.

イ・カルチャーを、多くの地域のより広範囲の人々に提供していく役割を担うようになる。教区の大きさはうらはらに、マイクロ・レベルでの役割は、地域の小教区教会のほうが大教区を担うミンスターより大きいものとなった。教区教会制への移行は社会の再組織化を伴い、封建制への移行期ともかさなる。ただし、このような変遷は地域差が大きく、一律にその変化の時期や変化の内容を語ることはできない。1100年以降も変化のプロセスはダイナミックで止まることなく、地域の小教区教会を中心とした共同体へと実を結んでいく。ミンスターの持つ多様性、階層性が、教区教会制度により単一的な形で地域住民にもたらされていくのである。

この期間の変化の激しさを物語る証拠がある。12世紀半ばに創設された小さな教会を見ると、産業革命以前に創設された教会の大半は1180年までには創設されているが、さらに100年前の1080年に存在したのはそのうちのおよそ半数だけなのである。11世紀から12世紀にかけて、小さな教会が急激に増加していったということである。

11世紀のグレゴリウス改革やノルマン征服に伴う変化のなかで、新たな宗教的秩序がイングランドに形成され、1180年までには教区教会に定期的に通うこと、10分の1税を教会に支払うこと、自分が属する教区の区分や、教区教会と荘園領主が私的に設置した礼拝堂との区別、世俗領主に対する教会の免税特権などが確立されていく。教区の司祭たちは、地域の経済・司法などさまざまな活動に関与していくが、11世紀以降中世後期までの具体的な流れをトレースできるような史料が現存している地域はほとんどない。いずれにせよ地域の小教区教会が宗教活動の中心となり、旧来のミンスターに所属する聖職者は激減する。グレゴリウス改革以後、世俗領主や血縁である王侯貴族からの物質的な支援を多く受ける活動は、聖職売買や墮落と見なされることも影響しているだろう。

12世紀以降も一部にはミンスターが残り、結果的に1200年ころの小教区の境界線は重層的で複雑に入り組んだものとなっていく。通常の小教区は小さく司祭の目が教区民に届き、必要な宗教的儀式を行える規模だが、地域によっては以前のミンスターの流れを組むような広大な教区内に教区民が分散し、教区教会に従属する複数のチャペルを持たざるを得ない場所もでてきている。

## (2) 用語をめぐる問題

上記では「ミンスター」と「教区教会」という用語を用いたが、ミンスターとは何を指すかも大きな問題となっている。

もともとはラテン語の *monasterium* (修道院) に由来し、古英語で *mynster* と表記される用語である。従って、元来は同じ語源の言葉であるが、「ミンスター」を今日使われる意味での「修道院」と同義にとらえることは誤りである。現在、「修道院」とは修道規則に従うという誓約をたてた修道者が共住する共同体を指すが、ベアダの時代のイングランドでは、厳密な意味での「修道院」はまだ見られない。ノーサンブリアのウエアマスとジャロウ修道院などいくつかの修道院が『聖ベネディクトゥスの修道規則』(Regula Sancti

Benedicti) をもとにした規則に従っていることが確認されている程度である。さらに複雑なことに、研究者のなかには、修道者の共同体を「モナステリウム」、修道者と司祭、さらに修道生活に参加する一般信徒を含めたゆるやかな共同体を「ミンスター」と呼び区別するケースもあるが、これもベータの時代にはなかった区分である<sup>3</sup>。当時のラテン語史料に残る用語としての「モナステリウム」に焦点をあてる研究者もいれば、「ミンスター」という用語を、厳密には定義できないがアングロ＝サクソン時代の修道院や教会など地域の宗教活動の拠点となる共同体ととらえる研究者もいる<sup>4</sup>。

いずれの場合も、後の時代につくられた用語や概念によって当時の状況を見る眼差しがゆがむことを懸念すべきである。

サッカーは、「モナステリウム」の活動状況について考古学的な証拠や史料などから、司牧をどのように担ってきたのかを検証している。また同時に、司教の教区への重い責任から広大な教区の住民すべての司牧を司教が担うことは不可能であること、「モナステリウム」付属墓地での埋葬状況から周辺住民を受け入れていること、またベータの説教集の文言から、聞き手を修道者に限定していない可能性があるとしている。さらに「モナステリウム」共同体の構成員は修道者、修道司祭のみならず、司祭や修道院の保有地で暮らす周辺住民も含まれている可能性があること、また今日の教区の語源となっているラテン語の「パロキア」(parochia)の初期の用例では、司牧の責任がある修道院の土地を指して使われているケースもあると指摘している。修道者は霊的指導を司る司祭と同じではないが密接な関係にある。ベータは、荒野で祈りを捧げる共同体による共住生活としての「モナステリウム」の生活を高く評価し、世俗から離れることを推奨する他方で、当時のイングランドの状況から、一般信徒への布教を担う修道司祭を養成する役割も担っており、矛盾を抱えていることになるのである<sup>5</sup>。

ブレアは、1016年に成立するデーヌ朝以前のイングランドには厳密な意味での修道規則は見られないこと、当時の「モナステリウム」や「ミンスター」の定義は困難であることからアングロ＝サクソン時代の宗教活動の点となる共同体を「ミンスター」と総称しているが、王侯貴族の創設した「ミンスター」の運営は領地におけるヒエラルキーと重なる形で展開されていること、多くのミンスターは王侯貴族のファミリー財産と見なされていることを指摘しており、聖俗の区分も曖昧であると指摘する。ただし、「ミンスター」の多くは修道院と修道者が主体であり、修道者を含まない司祭のみの共同体については、660年以前に *monasteria clericorum* がわずかながら記録にあるが、7から8世紀のイングランドにはみあたらないとしている<sup>6</sup>。

3. Alan Thacker, 'Monks, Preaching and Pastoral Care in Early Anglo-Saxon England', *Pastoral Care Before the Parish*, ed. John Blair and Richard Sharpe, Leicester, 1992, p. 139.

4. Blair, *op. cit.*; Thacker, *op. cit.*

5. Thacker, *op. cit.*, pp.139-160.

6. Blair, *op. cit.*, pp.80-84.

## 2. イースト・アングリアの状況

現在のイースト・アングリア地方は、ノーフォーク (Norfolk)、サフォーク (Suffolk) および内陸部のケンブリッシャー (Cambridgeshire) に行政区分が別れているが、その呼び名からうかがえるように「北の民」と「南の民」の二つのグループが大陸より渡ってきて、やがて7世紀にそれを統合する形で「東のアンゲル人の国」であるイースト・アングリア王国が成立した。当初はケント王国に従属していたがやがて勢力を伸ばし、『教会史』2巻5章では、レドワルド王 (Raedwald, d.624) はイングランドの7人の覇王の4番目として登場している<sup>7</sup>。サフォークのサトン・フー (Sutton Hoo) は巨大な遺跡であり、最初に発掘された墳墓では、27メートルの木製の舟形墓に多くの副葬品が納められていた。それには剣、兜、鎖帷子、槍、斧、銀器、スプーン、バックル、鍋、ランプ、財布などアングロ＝サクソン時代のイングランド芸術を代表する出土品が含まれており、銀皿にはビザンツ皇帝の刻印が、銀のスプーンには使徒パウロの銘もあり、大陸との交流を物語る貴重な資料となっている。そのほかに37の埋葬が確認されており、イースト・アングリア王家の墓地であったと伝えられているが、最初に発掘された舟形墳墓はその豪華な副葬品から、レドワルド王のものとも言われている<sup>8</sup>。

イングランドへのキリスト教の再布教は教皇グレゴリウス1世が派遣した修道士アウグスティヌスがケントに上陸した時から始まったとされるが、同時に北部ではアイルランドからも布教がすすめられていた。597年にアウグスティヌスはケント王国に入り、ケントのエゼルベルフト王が臣下とともに受洗し、ついでケント王国の覇権の及ぶエセックス王が受洗、同時期にイースト・アングリアのレドワルド王も受洗したが、完全にキリスト教化されたわけではなく、エゼルベルフト王の死後に各地で異教への揺り戻しなどが見られた。

レドワルド王の死後、レドワルドによって大陸に追放されていたシグベルトがイースト・アングリアに戻って即位したが、大陸滞在中にキリスト教に改宗しており、ブルゴーニュからフェリクス司教を招聘し、キリスト教化をすすめたとされる。『アングロ＝サクソン年代記』によると、636年の項にフェリクス司教がイースト・アングリアにキリスト教をもたらしたとあり<sup>9</sup>、Dommocに司教座を設置したとされる。

シリアの改革派司教タルサスのテオドロス (Theodoros of Tarsus, d.690) がカンタベリ司教の後任としてイングランドに来た当時、司教はイングランドに3人しかおらず、ロンドン司教ウィニ (Wini) はマーシア王より聖職を買いとり着任しており、ノーサンブリア司

7. Bede, *The Ecclesiastical History of the English People*, translated by Leo Sherley-Price, revised by R. E. Latham, London, 1968, p.111.

8. Sutton Hooの項目、*The Blackwell Encyclopaedia of Anglo-Saxon England*, ed. Michael Lapidge, John Blair, Simon Keynes and Donald Scragg, Oxford, 1999, pp. 432-436.

9. *The Anglo-Saxon Chronicles*, translated and edited by Michael Swanton, London, 2000, p.26.

教チャド (Chad) はウィニによる叙階を受けたため教会法の規定に反すると見なされており、三人目のウィルフリド (Wilfrid) は司教区の管理もできないという状況であった。テオドロスは教区組織を再編し、各地に多くの司教座を復活または設置したが、それでも12世紀までは司教区より修道院が布教のベースであった。東および南東イングランドには教区教会という共同体がなく、教会はデーン王朝以後に設置されるケースが目立つ。特にイースト・アングリアはアングロ=サクソン時代から中世盛期までの修道院あるいは教区教会の連続性が確認しにくい状況にある。

その原因は、イースト・アングリア王国が9世紀後半のデーン人襲来により滅亡し、その後ウェセックスの大アルフレッド王の時代に同地方はデーン・ロー地方としてデーン人の支配領域にされたことにある。この時代にイースト・アングリアの司教座は破壊され、イースト・アングリア司教は9世紀半ばから10世紀半ばまでは空位の状態で、そのためこの間に発給された証書類も少ない。その後、デーン人のカヌートがイングランド王に即位してデーン朝を開いた時には、イースト・アングリアはイングランドの4つの伯領の一つとなっていた。

### 3. イースト・アングリアの司教座

ノーフォークは教会の数が多し事でも知られており、現在も残る教区教会の多くは中世にまで遡る歴史を持つ。11世紀後半の『ドゥームズデイ・ブック』には241の教会しかリストにあげてこない。だが、ウォルター・ド・サフィールド司教の調査によれば、1254年にはノーフォークには少なくとも789の教会が存在していたことになる<sup>10</sup>。中世初期の教会の状況がわかりにくいのは、11世紀以前の教会で現存しているものがほとんど無いことによる。その理由として、11世紀以前の教会の多くは木造または編んだ細い木材に粘土の壁といったもろい材料で造られていたが、11世紀から12世紀にかけてこれらの教会を堅固な石造りに造りかえる「再建築ブーム (A Great Rebuilding)」があったからというのが定説ではあるが、小規模な教会の全てにこれが当てはまるのか、12世紀に創建された教会とそれ以前からあったとされる教会の区別は曖昧で、今後の考古学的な調査結果を待つべきだという見解もある<sup>11</sup>。

イースト・アングリアの司教座教会の状況はさらに複雑である。

『アングロ=サクソン年代記』によると、上述したように636年にイースト・アングリア王となったシグベルトが大陸よりフェリクス司教を招聘し、混乱状況にあったイースト・ア

10. Neil Batcock, 'The Parish Church in Norfolk in the 11th and 12th Centuries', *Minsters and Parish Churches, the Local Church in transition 950-1200*, ed. John Blair, Oxford, 1988, p.179.

11. Richard Gem, 'The English Parish Churches in the 11th and Early 12th Centuries: a Great Rebuilding?', *Minsters and Parish Churches, the Local Church in transition 950-1200*, ed. John Blair, Oxford, 1988, pp.22-23.

ングリア地方に再度キリスト教をもたらした。フェリクス司教はこの時、Dommocに司教座を設置したと伝えているし、ベータの『教会史』でも2巻15章でフェリクスの司教座がDommocに設置されたと述べられている<sup>12</sup>。しかしながら、このDommocが現在のどこにあたるかをめぐっては、研究者の意見が一致を見ていない。ダニッチ（Dunwich）とする見解もあるが、現在のフェリクストウ（Felixstowe, フェリクスの上陸地とされる）という主張もある<sup>13</sup>。その後、イースト・アングリア司教の名は1021年のエルフガ（Aelfgar）、1038年のエルフリック（Aelfric）、1043年のスティガンド（Stigand）、1085年のウィリアム（William de Beaufrei）などの名が『アングロ=サクソン年代記』に上げられるが、そのわずかな記述から司教座の様子をうかがうことは極めて難しい<sup>14</sup>。

『教会史』の4巻5章では、673年にイースト・アングリア司教ビシ（Bisi）がテオドロスによって任命されたものの、重い病のために司教の職責を負うことができず、そのために二人の司教エキ（Aecci）とバドウィン（Badwin）を任命し、それ以来イースト・アングリアには二人の司教が存在するようになったとの記述がある<sup>15</sup>。ベータはDommocにつぐイースト・アングリアの二番目の司教座については、いつどこに設置されたのか何も言及していないため詳細は不明だが、遅くとも803年にはエルマム（Elmham）に置かれていたようである<sup>16</sup>。二人の司教の記録は9世紀前半まで続き、その後、デーン人の襲来とそれに伴うイースト・アングリア地方のデーン=ロー化により、840年以降およそ1世紀近い間、司教座と司教の記録は途切れることになる。その後、ロンドン司教テオドレッド（Theodred）が10世紀半ばにエルマム司教として現れ、司教座は1071年にセトフォード（Thetford）に移転され、さらに当時の司教ハーバート・ド・ロジंगा（Herbert de Losinga）によりノリッジ（Norwich）に移された。

イースト・アングリアの二番目の司教座となったエルマムとはどこなのかをめぐる議論もあった。なぜならば、ノーフォークとサフォークのそれぞれに、ノース・エルマム、サウス・エルマムという地名があり、何れもかなり古い石造りの教会の遺跡が残されているためである。今日ではさまざまな状況から、ノース・エルマムが有力とされている<sup>17</sup>。ノース・エルマムも教会の遺跡の年代特定をめぐり、様々な議論があるが、リゴルドはノース・エルマムの発掘調査結果から、基礎と下部構造はデーン=ローより支配権を回復する前後である920年頃、石造りの上部構造は1020年頃に建造されたものとの結論を出している<sup>18</sup>。

12. Bede, *op. cit.*, p.133.

13. S. E. Rigold, 'The Anglian Cathedral of North Elmham, Norfolk', *Medieval Archaeology*, vol. 6-7, 1962-3, p.67.

14. *The Anglo-Saxon Chronicles*, pp.154, 160-161, 1043, 164-6, 216.

15. Bede, *op.cit.*, p215.

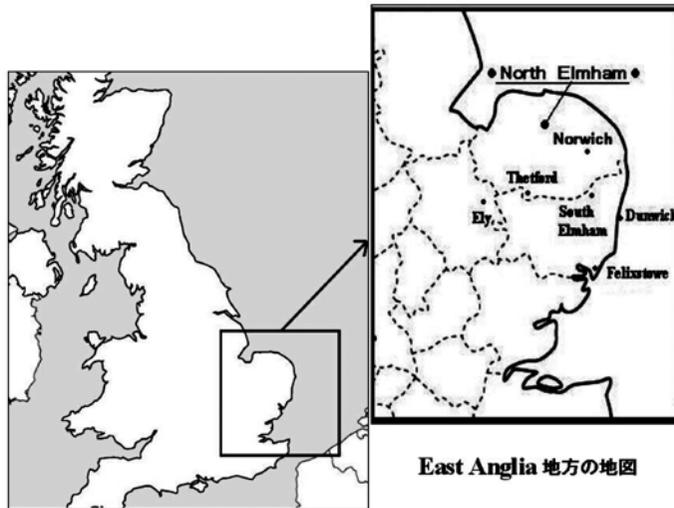
16. S. E. Rigold, *op. cit.*, p.67.

17. Richard Howlett, 'The Ancient See of Elmham', *Norfolk Archaeology*, vol. XVIII, 1914, pp.105-128; S. E. Rigold, *op. cit.*, pp.67-108.

18. *Ibid.*, p.108.

ノース・エルマムを2009年夏に訪れたが<sup>19</sup>、ノリッジよりバスで2時間ほどのディアラム(Dereham)からさらに乗り継いださきにある小さな村であり、アングロ=サクソン期の教会の遺跡があるにもかかわらず、村そのものは極めて小さく、現在の交通網からははずれた辺鄙なところにある。この遺跡(写真参照、筆者撮影)は、グーグル・マップの航空写真でもはっきりと認められる規模のものだが、そこから小道ひとつはさんだところに現在の教区教会である聖メアリ教会がある。人口の少ない村ゆえか司祭が常駐していない教会であるが、周辺に広大な墓地を擁する伝統ある教会で、上述のノリッジ司教ロジंगाがノリッジに司教座を設置後にこの地に新たな石造りの教会を建てたとされている。現在遺跡となっているかつての司教座教会周辺の墓地は12世紀まで使用が続いていたにもかかわらず、ロジंगाはあえて新たな教会をその隣接地に建てた。その理由をバトコックは、司教が所有する荘園がエルマムにあったため、司教館から教区教会を離しておきたかったのではと推測している<sup>20</sup>。

ウェセックスやケント地方などと比較すると、イースト・アングリア地方は初期の教会と司牧活動の状況がみえにくい、ノース・エルマムからセトフォードへ、さらにノリッジへと移転される司教座の動きや同時代史料、考古学的な調査結果などから、この地域の教会と司牧のありかたについて、今後再検討をはかりたい<sup>21</sup>。



19. 提携研究者として参加している平成21年度科学研究費補助金基盤研究(B)「中世ブリテン諸島における教会組織の再検討」(21320140、研究代表者：北海学園大学常見信代先生)の研究の一環として訪れた。

20. Neil Batcock, *op. cit.*, p.189.

21. なお、この研究ノートは平成21年9月4日に北海学園大学で行った研究報告をもとにまとめたものである。



